

「芭蕉俳句」というけれど

二年生、一年生と来たから、今日は三年生だね。松尾芭蕉について書きます。「『芭蕉』と言えば『俳句』」と答える人が多いだろうけど、本当にそうかな？今日はそんな話から入ります。いきなりクイズです。五七五七七の



三十一音で成り立つ短歌と、五七五の十七音で成り立つ俳句はどちらの方が古いのでしょうか。答えは、圧倒的に「短歌（の方が古い）」です。短歌が日本になかったら、俳句は生まれてこなかったでしょうね。

短歌は、日本最古の詩集である奈良時代の「万葉集」に初めて見られます。文字で残っている短歌は「万葉集」が最初ですが、恐らくその前から短歌は人々に作られ、親しまれていたようです。

その短歌は平安、鎌倉と盛んに作られていきますが、鎌倉前期辺りから、少しずつ短歌の一部が「連歌」へと変化し始めます。五七五の上の句と、七七の下の句を別々の人が作るようになったのです。そして、それを何人かで連続させて、どちらかというとおもしろみを求めて創作されるようになっていきます。すると、芸術性やすばらしさは失われていってしまいました。

「これではだめだ！」と立ち上がったのが、江戸時代に生きた松尾芭蕉です。彼は上の句の五七五に芸術性をもたせ、新しい「俳諧」を作り上げました。したがって、「芭蕉俳諧」なのです。この芭蕉については、また今後詳しく話していきますね。芭蕉は魅力的な人ですから、楽しみにしておいてね。

では、「俳句」という言葉は、いつ、どこで生まれたのかという疑問が生まれますよね。実は、その言葉を生み出したのが明治時代に生きた正岡子規なのです。

彼を知っていますか。びっくりするぐらい似ていて本人のお笑いのネタにもなっています。お笑い芸人「バイキング」小峠さんとそっくりです。左の写真が正岡子規です。小峠さんではありませんよ。

話がそれましたね。それでは、次回は芭蕉の生き方について教科書の古典教材と関わらせて書きますね。乞うご期待！



(五月一日 記)